

## No.57 片瀬 和夫 「星座又は星の宿」

Kazuo Katase

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年1月15日付 立川市市報記事より

片瀬和夫はドイツで仕事をしている作家で、その作品にはどこか禅の考案の趣がある。ここでも球と平面、インドの石と日本の瓦、という二つの異なったものの関係性を見ることによって人は何か考えてしまうように誘われる。

作家によれば瓦に穿たれた星の数は27個で、これはブラジルの国旗にある星の数と同じである。

作家は、ブラジルはアマゾン川の熱帯雨林に関心を持っているという。東洋、あるいは、エコロジーという観点はアーティストが若い時からドイツで仕事をしだしたと無縁ではない。地球環境や平和というテーマが、東洋思想によって支えられていると考えているからだろう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

むかし、むかし、この地は真黒な焼け跡だった。

ギリシャの神ゼウスは空飛ぶ巨大な怪鳥に命じて、わが大和の神、豊受大御神=プロメテウスを縛しめた。それはカオスの太古の風景のように、そのとき地界からは血のような溶岩が流れだし、天界からは涙のように多くの星が流れて屋根に宿した。

大変心の優しい、わが民族の豊受大御神=プロメテウスは神や人を助けるために、いつも多く作り過ぎてしまう癖があるようだ。今、東方に浮かぶアトランティスが作り過ぎて、沈没しかかっている。父のアトラスはわれらディオニソスに助けを求めている。

「コスモス (秩序) とカオス」、ルネッサンスからのパースペクティブによる視覚的秩序の思考はボーダーを宿命としたポリスにおいて、今や知の過剰生産によるコンベンショナルなトータリタリアニズムを作ってしまうことになった。

だからそこで非パースペクティブなポリス、神話が生息するようなポリスを作り出さねばならぬ。そこでは神や人がエロス (愛) によって結ばれて、ほど良く調和を作り、その町角では枝垂れ桜のような美しく、豊かなアフロディーテに出会うことだろう・・・。

さて、わが作品は2つの品のダイアログになった。

球体 (120cmφ) は手作りのインド産玄武岩 (マグマ) で、それに一点の星が刻印された。

「天上天下唯我独尊」。

敷瓦 (360 cm<sup>2</sup>) は日本産鬼瓦。それにブラジルの国旗から27点の星が刻印された。

その星はアマゾンの雨林の夜の星を意味するという。

アマゾンの神話では子供が亡くなると夜空の星になるといわれる。  
雨が降る。屋根上の瓦の星に雨水が溜まる。そして又天に帰る。  
人はゴールド＝光＝アポロンを求めて雨林を伐採する。かつて、そのゴールドのためにクリストファー・コロンブスはあのサンタ・マリア号を出帆させた。そして世界の歴史は大きく変わっていった。  
ブラジルの国旗に「秩序と進歩」と書いてあった。

### 《ファーレ立川への一言》

1986年にベルギーのアントワープでシャムブル・ダミ展があった。  
それはヤン・フート氏によるヨゼフ・ボイス氏の社会彫刻論の実践であった。  
我らのこのファーレ立川は北川フラム氏によるそれである。  
前者は様式の明確なヨーロッパ的コンテクストであり、後者はスタイルカオスのアジア的コンテクストである。  
アートの歴史と構造にゆさぶりをかける情熱とロマン、こういうエネルギーが新たな歴史と世界を作っていくのである。  
ヨーロッパ（アメリカ）文化の輸入主義はもう終わった。  
日本、いや世界の至るところの大地からファーレの精華を咲かせよう。  
そして地球のシンポリオン(饗宴)が始まる。

「不二」1994年6月3日、Kasselにて